

19世紀フランス民衆世界の子どもたち

天 野 知恵子

近代化が進んだ19世紀のヨーロッパ社会で、子どもたちはどのような生活を送っていたのであろうか。とりわけ、都市化や工業化が急速に進展する中であっても、世紀を通し貧しさから解放されることのなかった民衆の世界において、子どもたちはいかに日々を生きていたのであろう。以下ではおもにフランスを取り上げ、19世紀の社会を舞台として書かれた文学作品や子ども向け読み物、さらには自伝・回想録などの資料を手がかりにして、そこに描かれている子ども像を明らかにしながら、その歴史的背景をさぐってみたい。

パリのガヴローシュ

ミュージカル作品でも知られる『レ・ミゼラブル』（1862年）は、ヴィクトル・ユゴー（1802-85年）の代表作である。主人公のジャン・ヴァルジャンをはじめ、ヒロインの孤児コゼット、その恋人のマリウス、主人公を執拗につけねらう警察のジャヴェルといった人びとが、何十年にもわたる長い劇的な物語を織りなしていく。彼らのほかにも、この物語には忘れがたいさまざまな人物が登場する。中でも印象的な一人が、パリの浮浪児ガヴローシュである。路上で毎日を明るくたくましく生きていたが、共和主義者たちの民衆蜂起のさなか、鎮圧にやってきた軍隊の銃弾を受けて命を落としてしまう。

子ども好きだったと言われるヴィクトル・ユゴーは、『レ・ミゼラブル』において、パリに生きる浮浪児たちに優しいまなざしを向けている。

この小さなものは陽気だ。食事をしない日はあっても、気が向けば毎晩見世物を見に行く。体にシャツもつけず、足に靴もはかず、頭上には屋根もない。そんなものは何一つ持たない空中の蠅のようだ。七歳から十三歳ぐらいで、群れをなして暮し、うろつきまわり、野宿をし、踵の下まである父親の古ズボンをはき、耳まで隠れる別の父親の古帽子をか

ぶり、黄色い端布の一本きりのズボン吊りをつけ、走り、隙を狙い、獲物を捜し、時間をつぶし、パイプをくゆらし、ひどい悪態をつき、酒場に入ったりし、泥棒と知り合い、街の女と仲良く話し、隠語を口にし、みだらな歌を歌うが、心には少しの悪気もない。それは、真珠の心と純潔とを持っているからで、真珠は泥の中でも溶けないものだ。人間が子供であるかぎり、神も純潔を望むのである。

この巨大な都会が、「あれはなんだね？」と訊かれたら、「わたしの子供だ」と答えるだろう¹⁾。

町なかをうろつく浮浪児は、時代や地域を問わず、いつでもどこにでもいた。しかしながら彼らはとりわけ、急速に発展した近現代の都市に特有の存在である。浮浪児というと、親を亡くし住む家を失った子どもだと思われるがちであるが、必ずしもそうではない。親がいて、帰る家があっても、帰らない子どもたちであることが多かった。

産業革命の時代、経済成長を背景にして、都市にはたくさんの人びとが集まった。パリの人口は、1800年頃には60万人程度であったが、世紀半ばには130万人にふくれあがっている²⁾。しかしながら、急増する人口に都市機能の整備が追いつかなかった。1830年代からパリやロンドンでは、コレラが大流行しておおぜいの死者を出しているが、それには、当時の住宅事情や衛生状態が劣悪だったという理由をあげることができる。仕事を求めて都市にやって来た人びとは、低賃金で長時間働いたうえに、不潔な貧民窟でひしめきあって生活した。そうした日々を送っていれば、心のゆとりは失われていく。夫婦が互いを、親が子どもをかえりみるものがなくなり、家庭の崩壊も生じた。狭苦しい家の中で毎日がみあって暮らす家族を見て、子どもたちは家を出て行く。町中には少なくとも自由な空間があり、親の怒声も聞こえなかったからである。このようにして19世紀ヨーロッパの大都市には、たくさん浮浪児が生み出されるようになった³⁾。

『レ・ミゼラブル』のガヴローシュも、その一人として描かれている。両親は地方で宿屋を営んでいたが、破産してパリに流れてきた。父親は欲深で卑しく、きまぐれな母親は娘たちの世話はするのに、息子には無関心で、ガヴローシュとその弟たちを見捨ててしまう。ユゴーはガヴローシュを、「父母がありながら、孤児だという、とりわけ可哀そうな子の一人」として書いた。家に帰ったところで「貧乏と悲惨だけが目についた」の

であり、笑顔ひとつない。「暖炉が冷えていたように、人の心も冷えていた」。けれども「彼はそんな暮らしを苦にしなかったし、誰も恨んでいなかった。父母がどうあるべきかをよく知らなかったからである」。

女の子の場合には、家から出ることが娼婦の世界への入り口となることが多かった。19世紀後半の社会に生きるさまざまな人びとの実態を生々しく描いた小説で知られるエミール・ゾラ（1840-1902年）は、1881年、『フィガロ』誌において次のように書いている。

両親の家では生活がますます耐え難くなる。食べるパンもろくになく、毎晩殴り合いだ。しばしば彼女までがついでに殴られる。とりわけ彼女を絶望させるのは、いつも同じ服を着て、しょっちゅうそれを繕わなければいけないことだ。下品な言葉や、貧困や、不潔さにもうんざりしてきた……そこである朝、彼女は出奔してしまう。彼女の言い草によれば、もはやそこで生きていくことなど不可能だし、自分はあまりに不幸だ、それは親のせいだ、というのである。誰でもいい、たまたまそこに男がひとり現れると、毎日夕食にありつき、清潔な下着を身につけたいばかりに彼女は身をまかせせる。こうしてパリには娼婦がひとり増えるというわけである⁴⁾。

家を出た浮浪児たちはしばしば、仲間で一緒に生活した。1840年にパリの治安状況について書かれた報告書には、「7歳から16歳」の浮浪児たちが一種の団体を作り、親や奉公先の親方の追及を逃れるために助け合っていると書かれている⁵⁾。子ども一人の路上暮らしは無理でも、集団で行動すれば、食べ物やねぐらを見つけ分け合うことができた。また、成長を続ける近代の大都市はときに、身を寄せ合う子どもたちが生きるためのささやかな場も提供することがあった。『レ・ミゼラブル』のガヴローシュが、そうとは知らずに幼い実の弟たちを救い、ナポレオンのエジプト遠征にちなんで建てられた象の記念物の中に寝かせてやったように。だが、路上での生活は厳しく、子どもたちはしばしば盗みをはたらいた。1828年1月の『ジュルナル・デ・デバ』誌にはたとえば、「一番上が15歳の3人の子ども」が窃盗で逮捕されたという記事が出ているが、そこには、「彼らは泥棒たちの隠語を理解し、その手口もすべて知っているように思われた」

と書かれている⁶⁾。路上で暮らす子どもたちは、犯罪と隣り合わせで生きていたのである。

19世紀のパリはまた幾度か、革命の舞台になった。そんなとき浮浪児たちは、ガヴローシュのように、実際に蜂起に加わりもした。画家ドラクロワ(1798-1863年)の『民衆を率いる自由の女神』は、七月革命(1830年)で立ち上がったパリの人びとを描写した絵画として有名であるが、そこには、自由の女神のうしろで、二丁のピストルを振りかざして叫ぶ浮浪児の姿が描かれている。日頃治安当局からよく思われていなかった子どもたちだけに、蜂起の際には、民衆の側に立って権力と戦ったのであろうか。彼らの姿は、1850年代の民衆蜂起においても目撃されている⁷⁾。

19世紀パリ民衆の最後の戦いとなったパリ・コミュン(1871年)はとりわけ、数多くの年若い人びとがコミュンの防衛に加わったことで知られる。鎮圧後には、16歳以下の少年が651人逮捕されているが、その29パーセントは14歳以下であった⁸⁾。もとより、彼らがみな路上生活者だったわけではないが、民衆の世界に生きる子どもたちであったことに違いはなかろう。銃を手にして最後までコミュンを守ろうとした少年たちの存在は、エドモン・ゴンクール(1822-96年)が残した日記にも記されている。彼は早世した弟ジュールとともに、世紀後半のパリの社会状況や文壇動向を日記につづっていたことで知られる人物である。以下は1871年5月23日付の記述で、「血の一週間」と呼ばれたコミュン最後の日々の記録である。

このように退却、放棄、逃亡が続くなかでドゥルオ通りのバリケードの抵抗は長く続いている。銃撃はいっこうにやみそうにない。しかし次第に、砲火は激しさを弱めてきた。やがて散発的な銃声をするだけとなった。最後に、二、三発のぱちぱちという音がした。ほとんどすぐ、バリケードの最後の守備隊が退却するのが見えた。十五歳ばかりの四、五人の兵隊がいたが、なかの一人が、「近いうちにまた来るぞ」とどなっているのが聞えた⁹⁾。

『民衆を率いる自由の女神』の絵を見て、『レ・ミゼラブル』を読めばおのずと、パリの民衆蜂起に際してバリケードにたてこもる浮浪児の姿が思い浮かぶ。膨張を続けた近代ヨーロッパの大都市にして、数回にわたる革

命を経験した19世紀のパリに出現した浮浪児——その姿は、ドラクロワとユゴーの作品によって不朽のものとされたのである。

近代ヨーロッパ社会を舞台に描かれた有名な小説の中で、浮浪児が登場する作品としても一つ、イギリスのものであるが、コナン・ドイル(1859-1930年)作のシャーロック・ホームズの物語をあげておこう。『四人の署名』(1890年)は、インドの財宝をめぐる謎をホームズが解き明かしてゆく話であるが、この小説の中に、ロンドンの浮浪児たちが姿をあらわす。「うすよごれてぼろをまとった」「一ダースばかり」の子どもたちであったが、年かきの少年をリーダーにして行動していた。ホームズによって「ベイカー街遊撃隊(ベイカーズトリート・イレギュラーズ)」と名付けられた彼らは、駄賃をもらって探偵の手足となり、謎の人物の手がかりを追ってロンドン中を駆け回る。ホームズはこの少年たちについて、次のように語っている。「彼らはどこへでも行くし、なんでも見るし、だれの話でも聞きつけるんだ」¹⁰⁾。

『四人の署名』で「ベイカー街遊撃隊」は、犯罪捜査に活躍する。だが、それはあくまで作り話の世界のことである。実際には、近代都市にたむろした浮浪児たちのまわりにはいつも、貧困と犯罪が取り巻いていた。盗み、恐喝、詐欺、売春は日常のことで、子どもたちは容易に、殺人や傷害といった暴力事件の被害者にも、また加害者にもなりえた。路上で生きることを選んだ、あるいは余儀なくされたどれほど多くの子どもたちが、社会に背を向け、心や体に重い傷や病を負いながら、短い生涯を閉じたことであろう¹¹⁾。

農村に生きる子どもたち

19世紀の間、フランスはずっと農業国であった。都市部の人口が農村部を上回るのは、第一次世界大戦後である。多くの子どもたちが農村で時を過ごした。もっとも、彼らのすべてが農民としての一生を送ったわけではない。都市へ、あるいは近くにつくられた工場へ、労働者として働きに出ることも多かったからである。たとえば、フランス中部リムーザン地方の村に生まれたマルタン・ナド(1815-98年)は、15の年に父に連れられ、石工になるためパリに出た。ナドは農民として子ども時代を過ごしたのち、パリの労働者として青年時代を送ったわけである¹²⁾。一人前になるとパリ

で石工として働き、ときどき故郷に帰るとというのが、リムーザン地方で引き継がれてきた男たちの生き方であった。

農村の子どもたちは、幼い頃から農作業を手伝った。次にあげるのは、19世紀初頭、セーヌ＝エ＝マルヌ県の報告に見られる記述である。

農村では7歳かそれ以上になると、力のいらぬちょっとした仕事に子どもが使われるようになる。雌牛を一頭とか、羊を何頭かまかさされる。木ぎれや牧草を集めたり、小さな薪を作ったりもする。彼らの体は大地にかがむのに慣れていき、重い荷を運ぶ訓練もする。そして力をつけると、15歳でついには彼らの手でも、鋤や鍬をうまく操れるようになる¹³⁾。

10歳にもならないうちから、子どもたちは牛や豚、羊や山羊などの家畜の面倒を見た。女の子たちは、鶏小屋で家禽を世話した。農民作家として知られ、その生涯を中部フランス、ブルボネ地方の農村で過ごしたエミール・ギヨマン(1873-1951年)が、知り合いの農民エティエンヌ・ベルタン(通称ティエノン)から聞き書きしてまとめたという『ある百姓の生涯』(1904年)にも、そうした記述が見られる。ティエノンは1823年に貧しい小作人の家に生まれた。彼は7歳で羊飼いを、9歳では豚飼いをした。羊飼いの場合、悪天候には外へ出なくて良かったが、豚は雨でも雪でも野原に連れていかなくてはならなかったので、とても辛かったという¹⁴⁾。

畑仕事においても、子どもたちはできる仕事を手伝った。とりわけ忙しい収穫時には、子どもたちも刈り取られた麦を運び、束ねられた穂をほだき、脱穀された穀粒を集めて袋に入れたりした。年上の子供たちは、小さな鎌や唐竿を使って、麦の刈り取りや脱穀のための麦打ちを行った。農具を上手に扱えるようになることが、一人前になったあかしと見なされた。繁忙期の農作業では家族全員の労働が必要であったから、子どもたちも懸命に働いたのである。

農村ではしかし、農閑期である冬の間には、ゆっくりした時間があった。とりわけ、長くて寒い夜、照明と暖房の節約のために数家族が一軒の家に集まり、暖炉の前で過ごす「夜の集い」は、雑談や遊びをする格好の機会であった。子どもたちも炉辺に集まり、大人の話に耳を傾けた。たわいない噂話や戯れ言、ときに卑猥な話に加えて、地域に古くから伝わるさまざま

まな物語や格言なども語られ、子どもたちに教えられた。

先にあげたマルタン・ナドは、故郷リムーザンでの「夜の集い」の思い出を、次のように語っている。「私たちの夜の集いは、いつもきまった家でひとりの老女を中心にしていて、その老女の話すことをみんなは一心になって、大変な敬意をいただきながら耳を傾けたものである」。この老女は村の産婆で、植物にも詳しくあった。彼女が語る幽霊話や怪談には「どこか真実味があった」ので、ナドは帰り道ですっかり恐怖にとりつかれ、母親にしがみついた。そんな夜に母親は、彼が寝つくまで枕元にいてくれたという¹⁵⁾。

次に、ギョ・ド・モーパッサン（1850-93年）の短編集から、「田園秘話」と題された話（1882年）を紹介しよう。ある農村に、二軒の農家があった。どちらにも6歳を頭に4人の子がいた。食事の時間になると、母親が子どもたちを呼び集め、年齢順にテーブルに座らせた。

子どもたちの前には、スープ皿が置かれた。ジャガイモがいくつか、キャベツを半分に切ったもの、それにタマネギが三つ、こういうものをぜんぶ一緒に煮込んだスープのなかに、パンが浸してあった。並んだ子どもたちは、おなががいっぱいになるまで食べた。赤ん坊には、母親が食べさせてやった。日曜日には、スープに少し牛肉が入るので、それがみんなにとってなによりのご馳走だった¹⁶⁾。

ここに描かれているように、農民の生活は質素だった。ほとんどいつも、あり合わせの野菜を煮込んだスープに、堅いパンを浸して食べた。きれいで形の良い果物や野菜は市場へ持っていくので、食卓に上るのは曲がった野菜やいたんだ果物であった。都市部と農村部における暮らしぶりの隔たりは大きかった。それでも19世紀には、農民の多くが深刻な飢餓からは解放され、キリスト教的習俗に彩られた世界に生きることができた。

そうした農村での生活については、ノーベル賞作家のフレデリック・ミストラル（1830-1914年）に語ってもらおうことにしよう。彼はフランス南東部プロヴァンス地方のアール近郊の村に生まれた。父は旦那様と呼ばれる豊かな農民であったが、幼少期には、農場で働く作男や牧童と一緒に遊んだ。のちに南フランス独自の言葉や文化の保存につくすことになるミストラルにとっては——いささか美化されてもいようが——原体験とな

るなつかしい日々であった。

野良仕事に明け暮れる田舎の素朴な生活は、なんと楽しいものだったろう。季節が変わるにしたがって、仕事の内容も次々と改まる。耕作、種蒔き、羊毛の刈り取り、草刈り、養蚕、麦の取り入れ、脱穀、葡萄の収穫、オリーブ摘みなど、作業は際限もなく続き、けっして楽なものではない。しかし人びとは、ほかから拘束されることなく、てきぱきと仕事を進め、皆、生活に安んじて、心の平静を保っていた。そこには、土に生きる農民の厳粛な姿が余すところなく展開していたのである¹⁷⁾。

さて、話をモーパッサンの「田園秘話」に戻そう。あるとき、都市からやってきた裕福な若夫婦が、子どもを一人養子にほしいと願う。二軒の農家のうち一軒は拒否したが、もう一軒は承諾し、いちばん小さな子がもらわれていった。そして、それから何年かたって……。この物語、なかなか皮肉な結末を迎えるが、ここでは書かないでおこう。モーパッサンの短編には、「子ども」を軸にして農村や都会の社会風俗を描いた作品がいくつもある。たとえば、未婚の母をもつ「父なし子」への偏見をテーマにした「シモンの父さん」。甥の洗礼式で赤ん坊のかわいらしさに心を動かされた司祭が、子をもてぬわが身に思いをいたす「洗礼」。さらに、棄てた愛人が死の床で出産したと結婚式の夜に告げられ狼狽する花婿が登場する「子ども」——この話では、新生児の存在を知った花嫁が放つ最後のことばが印象的である。いずれの物語も、短編小説として興味深いだけでなく、19世紀後半のフランスにおいて子どもがどのようにイメージされていたかを解説するための格好の手がかりである。

農村における初等教育のひろがり

19世紀フランスの農村の子どもたちは、どのように学校教育を受けたのであろうか。

フランスにおける初等教育の組織化は、17世紀末に、カトリックによって国内の宗教統一をはかろうとした王権が、その手段として教育を利用し、初等学校の設置を促したことから始まる。その後フランス革命のときには、教育は国民育成のために重要な国家の仕事と考えられ、カトリック教

会からの切り離しが行われた。けれどもナポレオン期を経て王政復古期になると、教育は再びカトリック教会が掌握するようになった。やがて七月王政下の1833年に、各市町村に公立の初等学校を、各県に一つの師範学校を設ける法令が定められた（ギゾー法）。だが、第二帝政期までの間は、フランスの教育はカトリック教会によって支配されていた¹⁸⁾。

初等教育の進展は、19世紀を通してずっとはかられた。就学率は世紀が進むに連れて上昇していく。1817年には86万人あまりだった就学児童数は、1837年には269万人に、1866年には451万人を越えた¹⁹⁾。1830年代には、初歩段階の教育を終えた年長の子どもが教師の指導の下で年少の子どもを教えるやり方がイギリスから導入され、100人規模の生徒を抱える学校もできた。とはいえ、農村の人びとにも教育の価値がひろく認識され、子どもの就学が当然視されるようになるには、長い時間が必要であった。たとえばマルタン・ナドの場合、父親は彼を学校へやろうとしたが、母親や他の家族が強く反対した。畑仕事には息子が絶対に必要だというのである。それでも父親の意向によって、ナドはパリに旅立つ前に、基礎的な教育を受けることができた。

初等教育のあり方を大きく転換させたのが第三共和政期である。1881年から1882年にかけて、初等教育の義務化と公立初等学校の無償化、および、公立初等学校の世俗化・脱宗教化が実現したのである。すべての市町村に学校がつくられ、公立の師範学校でたくさんのことを学んだ教師たちが、フランス語の読み書きはもちろんのこと、共和国の原理や愛国心を、さらには、初歩的な科学的知識や技術を子どもたちに教えた。就学児童数は、1886～87年には552万人を上回った²⁰⁾。

農村に学校が普及していくようすを、先に紹介した『ある百姓の生涯』に描かれたティエノンの証言を手がかりにして、見てみよう。1823年生まれのティエノンは、学校に行くことはできなかったが、10歳になった時から、村の教会に通って宗教教育を受けることはできた。カトリックの教えを子ども向けにわかりやすく説明したカテキスム（教理問答書）で学んだのである。

カテキスムを教えてもらう時が来た。これが世の中との最初の出会이었다。この場合の世の中とは、白髪でばら色の顔をした年寄りの司祭と、5人の男の子とで成り立っていた。うちの4人は、私と同じくらい

野蛮だった。ジュール・ヴァスナー一人だけは、宿屋兼たばこ屋の息子で、少しは器用者だと見られて、一番近い大きな町ノワイヤンにたびたび、授業を受けに行っていた²¹⁾。

この頃、学校は遠いところにあり、高額で、「ほとんどブルジョワと言っていい者たちだけが、子どもを学校へやることができたのである」。ティエノンには学校ではなく、教会に通って学んだ。カテキスムは朝8時の始まりだったが、教会まではゆうに一里(約4キロ)あったので、冬などは夜明け前にうちを出なければならず、雨の日は泥だらけになった。それでも2年後の1835年に、ティエノンは初聖体拝領を行うことができた。カトリック世界の子どもたちは、生まれるとただちに洗礼を授けられる。だが、12歳から14歳の頃に、信仰を確かなものにするために、初聖体拝領が行われるのが習わしであった。そして、そのためにも、初歩的なカトリックの知識だけは学んでおく必要があったのである。

ティエノンの話に戻ろう。世紀半ばの第二帝政期。ティエノンはすでに結婚し、子どもをもうけていた。彼は息子を学校へやりたいと思った。学校が普及し始めており、貧民向けの無料枠も設けられていたからである。だが、村の有力者である地主は反対した。「学校、学校ねえ。いったい何のためかね。お前自身学校へ行かなかつたが、パンを食うには困らなかつただろう。息子を早く仕事に出すんだ。その方が息子にもお前にも得だろうよ」。少しでも読み書き計算ができれば役立つし、知恵もつくので、せめて冬の間だけでも行かせてほしいとねばつたが、地主は認めてくれなかつた。「読み書き計算ができていいことをちょっとでも言ってみなさい。教育というのは、失う時間のある人間にはいいものだ。だがお前は、読みを知らずに日々を送ってきただろう。お前の子どもたちだってそうさ。それに、学校に一年やれば少なくとも25フランの金がかかると知らなきゃいけない」。では、無料枠をと願い出たが、一つの枠に10の申し込みがある状態だという。息子を学校へやるより、豚の見張りをさせる方がいいと地主は言い張つた。結局、ティエノンは息子を学校にやることができなかつた。

そして、第三共和政期の1880年代。どんな村にも公立の学校があり、無料で子どもたちを教えていた。この頃ティエノンは、若くして死んだ娘の子である孫のフランシスを引き取る。幼い孫を楽しませるために、ティ

エノンには悪魔や王様や妖精や親指小僧の出てくる話や、なぞなぞをしてやった。フランシスはいくつでも話をねだり、「全身を耳にして」聞いていた。だが、そんなことも長くは続かなかった。学校へ行くようになるとフランシスは、学んだことをティエノンに語り聞かせるようになった。そして、実際に起きたことを知りたがった。ティエノンはそれで、市に行くたび新聞を買ってきた。「われわれには理解できないことも載っていたけれど、孫が新聞を読んでもくれるのを聞くのが楽しみだった」。やがてフランシスは、自分で新聞を買ってきて読むようになり、気に入ったイラストを見つけると、切り抜いて壁に貼ったりした。

ティエノン自身は望むべくもなかったし、息子にもさせてやれなかった、学校へ行くということ——それは孫の代になってようやく、実現することができた。ティエノンは孫の知的な成長を喜んだ。それでも彼は、「12、13歳になる前に重い仕事を課されることのない今の子どもたち」が、自分と比べて幸運だという思いを禁じえなかったのである。

工場や炭坑で働く子どもたち

子どもの労働は、19世紀に特有の現象ではない。古来からずっと、社会の上層部を除く大部分の子どもたちは、親の仕事を手伝ったり、奉公先の徒弟や見習いとして親方や職人たちから仕事を教えられながら、成長してきたのである。けれども19世紀には、それまでになかった新しい状況が出現した。蒸気力で動く大型の機械の前で、機械のペースにあわせて単純な作業をくり返すというのは、産業革命以降に子どもたちが体験した新たな労働形態である。工業化が開始された頃、子どもの賃金は成人男性の3分の1、女性の半分ほどであったから、経営者たちは好んで子どもを雇い入れた。また労働者の側でも、家計の足しにするために子どもたちを働かせた。1840年のフランスでは、労働者の12パーセントは16歳以下であったという²²⁾。

機械の原動力となる石炭を掘り出す仕事においても、多くの子どもたちが働いた。炭坑町の子どもは10歳を過ぎれば、父や兄にならって地下にもぐり、石炭の採掘や運搬を行った。狭い坑道で石炭を運ぶには、体が小さい方がよかったからである。世紀半ば頃、南仏タルン県のカルモー炭坑では、20パーセント近くの炭坑夫が子どもだったという²³⁾。彼らは毎日

真っ黒になって働いた。そして、石炭から出る有害なさまざまな物質が、小さな坑夫たちの体をむしばんでいった。そのうえ炭坑には、恐ろしい事故がつきものだった。

19世紀フランス児童文学の作家として知られるエクトール・マロ(1830-1907年)の作品で、日本にも早くから紹介された『家なき子』(1878年)は、主人公のレミ少年が長い放浪の旅を続ける物語である。そこでは、レミが旅の途中で、坑夫として働く友人をたずねる場面がある。けがをした友人の代わりに、レミは坑道に入るのであるが、折悪しく出水事故に巻き込まれてしまう。彼は14日間地下に閉じこめられたのち救出され、九死に一生を得ることになる²⁴⁾。マロは1862年に実際にあった出水事故をふまえてその部分を書いたのであるが、炭坑ではそのように、地下水が流出し坑道を水没させる事故がたびたび生じた。そのうえ、坑道の天井が崩れる落盤や、地下のガスに引火する爆発事故も多発して、子どもを含む多くの命が奪われた。

有害物質に日々さらされる点では、煙突掃除の少年たちも、坑夫と同様であった。石炭をエネルギーとして利用する上で欠かせない装置として、産業革命期の工場にはつねに、黒い煙を吐く煙突がそびえていた。各家庭にも、暖房や調理のために暖炉があり、煙突があった。それゆえ工業化と人口増加の進む19世紀に、煙突清掃は需要の多い仕事であった。煙突の内側によじのぼり、内壁にこびりついた煤を掻き落とすのであるが、細い煙突では体の小さい者が役立つとされて、おおぜいの子どもたちが使われた。だがそれは、発ガン性物質を含む有毒な煤を頭から大量に浴びることを意味していた。

ドイツの児童文学者リザ・テツナー(1894-1963年)の『黒い兄弟』(1940年)は、19世紀前半のスイスとイタリアを舞台にして書かれた作品で、スイスの山村に生まれ、金で買われてミラノで煙突掃除夫になるジョルジョを主人公とする物語である。フランスが舞台ではないが、19世紀の煙突掃除という仕事の凄まじさを端的に記している子ども向け読み物として、少し紹介しておこう。ジョルジョがはじめて煙突の内側にのぼったときには、「煤が滝のようにふってきて」、「山のような煤がどさっとかぶさってきて」目も鼻も煤だらけになり、息がつまりめまいがした。ジョルジョはのちに煙突の中で気絶し、死にかけることになる。彼の親方は、自分の子どもにはとてもさせられないという仕事を、金で買ったジョルジョには

やらせていた。街の子どもたちからも軽蔑される煙突掃除夫の少年は、それほど危険な仕事を日々行っていたのである。ジョルジョはこの過酷な状況を、仲間とともに切り抜けていくことになる²⁵⁾。

他方、大型の紡績機や織機を備え付けた工場で子どもたちを待っていたのは、単純だが長時間にわたり神経を使う労働であった。原材料や糸を運び、整え、機械に取り付け、はずし、切れた糸を結びなおし、できあがった糸や布を運び出し、機械を掃除する——そうした作業の繰り返し、毎日延々と続いた。休みなく動く機械の速度についてゆけず、手足を傷つける子どもたちも多かった。また、換気が悪く湿り気が多い工場は、肺結核の格好の温床となった。

エクトール・マロのもう一つの代表作『家なき娘』（1893年）には、19世紀の児童労働や劣悪な労働環境についての記述がある。インド生まれの主人公の少女ペリーヌは、立て続けに両親をなくした孤児であるが、父が親の反対を押し切って結婚したがゆえに、フランスに住む祖父の前に名乗り出ることができない。辛く長い旅をして祖父が経営する工場のある町にやっとたどり着いたが、まずは正体を明かさずに工場で働く決心をした。そして、「男、女、子どもの工具」がひしめく狭くて息苦しい宿泊所で最初の一夜を過ごす。友人になったロザリーも工場で働いている。あるとき、ロザリーが手指を機械に挟まれ、けがをしてしまう。驚いた人びとが駆けつけるが、「一本指がつぶれただけ」だとわかると、現場監督は「たいしたことではない」と言って怒り出す。監督は義足の老人で、彼自身、工場の事故が原因で片足を失っていたのである²⁶⁾。

労働者として働く子どもたちにとって、工場は実際にどんなところだったのであろうか。長じて後女性労働運動家として活躍することになるジャンヌ・ブーヴィエ（1865-1964年）が、自身の子どもの時代の体験を記した回想録を見てみよう。彼女はフランス東部ドーフィネ地方で生まれた。父は鉄道員から樽屋に転職したのだったが、破産してしまったため、一家はひどい困窮に陥る。ジャンヌは11歳で絹の撚糸工場に働きに出なければならなかった。そして、朝の5時から夜の8時まで、途中2時間の休憩をはさんで実質13時間も働いた。1870年代後半のことである²⁷⁾。

フランスでは1841年に、8歳から12歳までの子どもの労働時間を日に8時間までとする法律がつくられた。だが、ほとんど守られなかった。1874年には、子どもが初等教育を受けることを前提として、就労可能年

齢を原則12歳とする法律ももうけられた²⁸⁾。しかしこの原則も徹底することなく、ジャンヌのように働かされる子どもたちがおおぜいいた。彼女は毎朝、5時15分前に家を出て工場に向かった。寒くて暗い冬はとりわけ辛かったという。そうやって50サンチームの日当を稼いだが、帰宅後も編み物をして家計を助けたので、睡眠時間はほとんどなかった。おまけに、上司の不正のせいでいつまでも賃金を上げてもらえず、母に叱られたこともある。別の工場に住み込みで働きに行ったところ、そこでは、「犬も食べるのをいやがるような」スープが、朝と晩に出た。寝場所の納屋には天井がなく、ベッドに座ると、頭が直接屋根瓦に届くほどだった。ジャンヌはのちに、女性や年少者の労働条件改善のために奮闘することになるが、それは、子ども時代のこうした辛い体験をふまえてのことであった。

子どもの「保護」から「国民」の育成へ

ゾラの代表作のひとつ、『居酒屋』（1877年）は、下町の洗濯女ジェルヴェーズの悲劇を描いた作品である。毎日を懸命に生きていたが、ブリキ職人の夫が屋根から落ちてけがをし、酒に溺れるようになってからは、彼女の人生も転落の一途をたどる。このジェルヴェーズの近隣に、酔っては妻を殴るを繰り返し、とうとう死に追いやってしまった男がいた。8歳の娘ラリーが母に代わって父や弟妹の世話をするのだが、男は幼いこの娘にもなさげ容赦なく暴力をふるいはじめる。ジェルヴェーズは、少女が傷や痣だらけになって横たわっているのを見て、「人間の世はなんて下劣なのだろう」と悲嘆にくれる²⁹⁾。けなげな少女が痛々しい体で死に瀕する場面は、哀しい結末に終わるこの物語の中でもひときわ悲惨で、忘れがたい印象を与える。

実際、アルコール中毒が大きな社会問題であった19世紀フランスの民衆世界において、わが子に暴力をふるう親は決してまれな存在ではなかった。それだけに、『居酒屋』に描かれたラリーのエピソードは、世論を動かす一つの契機ともなったと言われる。1889年には、家庭で虐待される子どもの保護を目的とした法が可決された。刑法に触れる行為を子どもに強いたような場合はもとより、親が「慣習的な酔態や、周知の恥ずべき不品行で、あるいは虐待によって、子どもの健康や安全や道徳性を危険にさらす」ような場合、親は子どもに対する権利を失うことになった。「子ど

もは人間であり、社会の構成員であり、肉体的にも精神的にも安全が保証されなければならない……公権力は子どもの保護を確かなものとするために、干渉する権利と義務とを有する」という考え方が示されたのである。それまで父親が絶対的権利をもつとされた家庭に、子どもの保護を目的として公権力の介入が認められた点で、これは画期的な方策と言えるものであった。1898年はさらに、子どもを虐待する親への罰則を強化した法も出されている³⁰⁾。

19世紀後半から20世紀初頭、西欧諸国は国民国家の成熟期を迎えていた。この時期に国力の充実をはかるためには、民衆の子どもたちを優秀な労働者や兵士として育成していく必要があった。とりわけフランスでは、出生率の低下が他の国よりも顕著にあらわれ、少子化が懸念されはじめていた。一組の夫婦がもうける子どもの数は、1831年には4人であったが、1892年には3人になっている³¹⁾。その上、男子普通選挙制を取り入れ、国民権の実現をめざした第三共和政のフランスにおいては、民衆の子どもたちもまずは何より、国家を担うことになる将来の国民であった。1885年に内相であったワルデック＝ルソーは、次のように言っている。

人間という財産、人的資本こそが、いちばん大切な富である。あるいはむしろ、ことばの厳密な意味において、それこそがまさに国家の内実そのものである。子どもの命を守ること、そうやって未来を保障していくことは……厳格な義務である。人口増加の動きが極端ににぶい我が国のようなところでは、この義務はなおさら絶対的である³²⁾。

こうして、子どもの保護を目的としたさまざまな政策が出されることとなった。たとえば、都市部の民衆が、赤ん坊を乳離れするまで農村部の里親にあずけ育ててもらおうという里子制度に、公的な監視の目が向けられた。フランスでは18世紀以来、パリやリヨンなどいくつかの都市で、子どもを農村に里子として託することがごく一般的に行われていたのである。たとえば絹織物業の町リヨンでは、1890年においてもなお、半数をこえる乳児（8101人のうちの4203人）が、里親宅にあずけられている³³⁾。農婦が農作業や家事の合間に、自分の子どもと一緒に里子を育てる制度であったが、1860年代には医師たちの間で、里子の死亡率が高いと問題視されるようになっていた。そこで1874年には、「養育料を支払って家庭外にあ

ずけられる2歳未満のすべての子ども」について、その生命と健康の保持のため、公権力が監視するという法（ルーセル法）が出された。子をあずける親は市町村役場に届け出なければならず、乳母となる女性にも、出身地の市町村長の身許証明書や、医師による健康診断などが求められることになった³⁴⁾。

フランスの公権力は19世紀を通して、従来は教会や慈善事業家の手に委ねられていたさまざまな福祉活動にも介入した。捨て子を減らす努力はその一例である。捨て子がかつては、各都市に設けられた養育院にあずけられ、女子修道会がその運営を担うことが多かった。養育院は「回転箱」と呼ばれる特別の受入口を設け、子どもの引き取りを容易に行えるようにしていた。捨て子が文字通り道端へ遺棄されるのを防ぐためである。この「回転箱」が、最後にマルセイユで閉じられたのは1868年のことである。未婚の母親たちには、育児手当が与えられるようになった³⁵⁾。

乳児を含む3歳以下の子どもをみる託児施設クレッシュも、1844年にはじめてパリにつくられ、1862年からは国家の監視下におかれることになった³⁶⁾。このクレッシュ、エクトール・マロの『家なき娘』においては、物語を展開させる大きな役割を果たしている。というのも、主人公ペリーヌの祖父の工場で働く女性従業員たちが乳飲み子をあずけていた家で、火事がおきるからである。そこは、「こわれかけのみすばらしい菓屋」で、「飲んだくれの老婆」一人が子どもたちをみていた。3人の子どもが命を落とし、ペリーヌの祖父には、母親たちの厳しいまなざしが向けられる。工具の劣悪な生活状態を知っていたペリーヌは、この機会に祖父を諭し、やがてりっぱなクレッシュが建設される……『家なき娘』の物語はこうして、企業主が従業員の福利厚生施設の充実をはかるというユニークな展開の中で、大団円を迎えることになる。

他方、7歳までの幼児を日中あずかる託児所サル・ダジールが、慈善活動家の女性たちによってパリに開設されたのは1826年のことである。ここでは働く母親たちのために、無料で100人近い子どもたちをあずかった。こうしたサル・ダジールは、就学前の子どもに対する教育の可能性に関心もたれたこともあり、その後急速に展開し、1840年頃には、フランス全国で1500を数えたという。19世紀を通して公権力の監視を受けたサル・ダジールは、1881年には保育学校エコール・マテルネルと名をあらため、公教育省の管轄下に組み入れられることになった³⁷⁾。

このようにフランスの公権力は、民衆の子どもたちに対してさまざまな働きかけを行った。だがその中でも、めだって大きな成果をもたらすことになったのが、初等教育の組織化である。教育の義務化に加えて、公立学校での脱宗教化という独自の特徴をもったフランスの初等学校は、第三共和政のもとで着実に広がった。1892年には、義務教育の徹底をはかるために、労働開始年齢を初等教育終了後の12～13歳とする新たな児童労働法も出されている³⁸⁾。学校では、フランス語をはじめ基礎的な知識が与えられ、愛国心の涵養がはかられた。また、アルコール中毒から身を守るといった身体管理の必要性も教えられた。どんな僻地にも学校はつくられ、赴任してきた教師たちの努力が、民衆の子どもたちを確かに変えていった。そのことは、19世紀最後の年、1900年に、貧しい辺境の地で生まれた二人の人物の生涯にもはっきりと示されている。

うちの一人は、エミリ・カレルという。彼女の故郷はフランス南東部アルプス地方の山村で、半年間は雪と寒さに閉ざされるような「労働と病気、そして死しか知らない山人の土地」であった。生活が厳しく、学校はあったが、村人は教育など不要だと考えていた。けれどもエミリは勉強好きで、学校では一番の成績だったから、教師が奨学金を取ってくれた。エミリはやがて教師になったが、最初に赴任した山村では、一人も生徒が来なかった。のちに彼女は、自分も野良仕事を手伝い、老人や赤ん坊の世話をしたり、学校で娯楽を組織するようになって、ようやく人びとに受け入れられることになる。貧しい少女が、教育を受けて自ら教師となり、努力を重ねて赴任先の村人の生活を変えていったのである³⁹⁾。

もう一人は、ジャン＝コランタン・カレという。ブルターニュ半島、モルビアン県西北部の村に生まれた。彼は15歳の時、年齢を偽って軍隊に入り、やがて戦闘機のパイロットとして活躍し、1918年に戦死した。故郷には、恩師にあてた彼の手紙が遺されている。

ぼくは敵のくびきの下で生きることはできません。だから兵士になりました。そうです、この名誉の感情、ぼくはこれを学校で学びました。そして、ぼくにそれを教えてくれた人の一人が、先生、あなたなのです！すべての小学生が、ぼくが教わったのと同様、教えてもらったことを理解するようぼくは願っています。人生は、十分に充実したものでなければ、なにもものでもありません⁴⁰⁾。

文面からは、カレの恩師が熱意をもって子どもたちに接していたことがうかがえよう。パリから西へ遠く離れたブルターニュ半島の地においても、教師の努力に裏打ちされた教育の力が、貧しい農民の少年を強い愛国心をもった国民に育て上げたのだった。

註

- 1) ヴィクトル・ユゴー、佐藤朔訳『レ・ミゼラブル』全5巻(新潮文庫)。引用は第3巻6-7頁。また、以下で『レ・ミゼラブル』からの引用は、同32-35頁。
- 2) 福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史——工業化と国民形成』(岩波書店・2005年)15-16頁。
- 3) 近現代都市の浮浪児に関する指摘は、高田宏『子供誌』(平凡社・1999年)参照。
- 4) 小倉孝誠・菅野賢治編訳『ゾラ・セレクション10 時代を読む 1870-1900』(藤原書店・2002年)15頁。
- 5) Maurice CRUBELLIER, *L'enfance et la jeunesse dans la société française 1800-1950*, 1979, p. 64.
- 6) *Ibid.*
- 7) Frédéric CHAUVAUD, “Gavroche et ses pairs”, *Culture et Conflit*, 1995, no18 : *La violence politique des enfants*, 1995, p. 25.
- 8) *Ibid.*, p.32.
- 9) ゴンクール兄弟、斎藤一郎編訳『ゴンクールの日記』上下(岩波文庫)。引用は上巻538-539頁。
- 10) アーサー・コナン・ドイル、阿部知二訳『シャーロック・ホームズ全集Ⅲ』(河出書房新社・1958年)124頁。
- 11) 都市の浮浪児は、決して過去のものではない。今日の世界でも路上で生活する子どもたちがいる。この問題に関してはたとえば、工藤律子『ストリートチルドレン——メキシコシティの路上に生きる』(岩波ジュニア新書)など参照。
- 12) マルタン・ナド、喜安朗訳『ある出稼石工の回想』(岩波文庫)45-46頁。
- 13) CRUBELLIER, *op. cit.*, pp. 57-58.
- 14) Émile GUILLAUMIN, *La vie d'un simple*, Éditions Stock, 1943, p. 42.
- 15) ナド、前掲書、21頁。
- 16) 高山鉄男編訳『モーパッサン短編選』(岩波文庫)57-70頁。
- 17) フレデリック・ミストラル、杉富士雄訳『青春の思い出』(富岳書房・

- 1989年) 40頁。
- 18) 19世紀における初等教育の普及については、谷川稔『十字架と三色旗——もう一つの近代フランス』(山川出版社・1997年) 参照。
- 19) Egle BECCHI, “Le XIXe siècle” dans Egle BECCHI et Dominique JULIA, *Histoire de l'enfance en Occident*, t. 2, 1998, p. 171.
- 20) *Ibid.*
- 21) GUILLAUMIN, *op.cit.*, p. 56. 本文で以下、この本からの引用は pp. 42, 172, 256-262.
- 22) Catherine ROLLET, *Les enfants au XIXe siècle*, 2001, p. 124 ; BECCHI, *art.cit.*, p. 192.
- 23) ROLLET, *Les enfants*, p. 138.
- 24) エクトール・マロ、二宮フサ訳『家なき子』上中下(偕成社文庫)。炭坑での出水事故については中巻を参照。
- 25) リザ・テツナー、酒寄進一訳『黒い兄弟』上下(あすなろ書房・2002年)。引用は上巻260頁。フランスでも19世紀の間、山岳地帯の子どもたちがたくさん煙突掃除に雇用された。サヴォワ出身者が多かった、というので、彼らはしばしば「小さなサヴォワ人」と称され、このことばはやがて、煙突掃除人そのものをさすようにもなった。この点については、Serge CHASSAGNE, “Le travail des enfants aux XVIIIe et XIXe siècles” dans BECCHI et JULIA, *op.cit.*, pp. 233-236.
- 26) エクトール・マロ、二宮フサ訳『家なき娘』上下(偕成社文庫)。工場でのけがについては上巻238頁。
- 27) Jeanne BOUVIER, *Mes Mémoires*, 1983. この回想録からの引用は pp. 56-61.
- 28) ROLLET, *Les enfants*, pp. 132-135.
- 29) エミール・ゾラ、田辺貞之助、河内清訳『居酒屋』上下(岩波文庫)。子どもの虐待に関する引用は下巻240頁。
- 30) ROLLET, *Les enfants*, pp. 234-235 ; *id.*, *La politique à l'égard de la petite enfance sous la IIIe République*, 1990, pp. 137-138. また岡部造史「フランスにおける児童扶助行政の展開(1870-1914年)——ノール県の事例から——」(『史学雑誌』第114編第12号、2005年)、同「フランス第三共和政における児童保護の論理——不幸な子供をめぐる議論を中心に——」(『メトロポリタン史学』第3号、2007年)。
- 31) ROLLET, *Les enfants*, p. 17.
- 32) *Ibid.*, p. 223.
- 33) *Ibid.*, p. 27.
- 34) *Ibid.*. また岡部造史「フランスにおける乳幼児保護政策の展開(1874-1914年)——ノール県の事例から——」(『西洋史学』215号、2004年)。

- 35) ROLLET, *Les enfants*, p. 60.
- 36) crèche に関する説明は *ibid.*, pp. 150–152.
- 37) salle d’asile に関する説明は Jean-Noël LUC, “Les premières écoles enfantines et l’invention du jeune enfant” dans BECCHI et JULIA, *op. cit.*, pp. 306–307.
- 38) ROLLET, *Les enfants*, p. 135.
- 39) 長谷川イザベル、長谷川輝夫『共和国の女たち——自伝が語るフランス近代』(山川出版社・2006年)第4章参照。
- 40) 拙稿「第一次世界大戦とフランスの子どもたち」『愛知県立大学外国語学部紀要』(地域研究・国際学編)第42号、2010年、63頁参照。